

「心を浮かべて2012」 With Mind Released

| | |
|-----|---|
| 著者 | 林 亨 |
| 雑誌名 | 北翔大学北方圏学術情報センター年報 |
| 巻 | 5 |
| ページ | 105-106 |
| 発行年 | 2013 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1136/00001039/ |

作品発表

「心を浮かべて2012」

With Mind Released

林 亨

作品発表

「心を浮かべて2012」

With Mind Released

林 亨

北翔大学 生涯学習システム学部 芸術メディア学科

最近4年間制作を続けている「心を浮かべて」と題したシリーズ作品は、その表現傾向を以前のシリーズよりも短期間で変化させている。掲載写真の作品は、本シリーズ第3段階の作品と位置づけているもので、複数の色彩による地塗り、モノクロに近い主要部分の彩色、そして、小さい筆触の3層構造になっている。札幌市内で行われた小品グループ展に出品したものであり、同様の表現内容で、2012年後半から現在までに10点近く制作した。この小品シリーズともいえるべき作品群は、物や風景の再現性は、ほとんどなくなっているように見えるが、制作の早い段階で具体的なモチーフ（モデル）をハッキリと設定したものが多く、結果的に形が判然としないものばかりであるから、第1段階に戻ったことになるが、制作の成り立ちが少し違っている。また、「水」に関するモチーフが多い傾向は第1段階から続いている。

これまで、本誌第1号から4号に掲載した制作ノートに於いて記した「心」と「身体性」の問題は、今回の作品にも継続して核となる問題である。「心」は主題としての問題で、「身体性」は方法の問題と分けて考えることも出来るが、二つのキーワードは、常に繋がった状態で制作する際に影響を受けている。

そして、現在最も制作に影響を与えているのは、昨年開催した「絵画の場合」展である。

2012年3月に開催した「絵画の場合2012 - 最終章 -」は、2004年から始めた同名の運動体の区切りという意味だけでなく、筆者が長年こだわり続けてきた「絵画の絵画性」の問題についても一区切り付けたいと願って実施したものであった。新たなメンバー5人を加えて3年ぶりに開催した同展は、これまで同様に、単なる展覧会ではなく議論編を含めた実験的な運動体として実施した。さらに、美術評論の専門家を講師に招いて勉強会を実施したり、作品を見せるだけでなく、作者が言葉で語り合う場を多く設けたりと、多面的に行われた。そして、今回は、筆者だけでなく多くのメンバーが影響を受けている美術評論家の林道郎氏を東京から招いて講演会を実施し、絵画論についての深い知見に基づいた美術史や美術理論と絵画制作の繋がりについて多くの示唆的な話を聞くことが出来た。それは、さらに議論を深め、思索を巡

らせるために、曖昧だった問題点を整理して、今後の研究の方向性を見つける契機となったのである。

今回写真掲載した作品は、その展覧会や講演会以降の制作の方向性を示す作品といえるが、前述の「心」と「身体性」の問題に加えて、絵画の基本構造を洗い直す作業がさらに増えたものになった。つまり、絵画表現の根本的な命題も含めて、限界を設けることなく、作品を作りながら、絵画について考え続けていく意義を改めて確認した作品と考えている。



上 FUNE 45.5×45.5
キャンバス・アクリル

右 YAMA 45.5×38.0
キャンバス・アクリル

